

J. S. ミルの遊休資本の理論：『試論集』第二論文の検討

諸泉，俊介
長崎大学商科短期大学部

<https://doi.org/10.15017/4493100>

出版情報：経済学研究. 59 (5/6), pp.149-164, 1994-06-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



J. S.ミルの遊休資本の理論 ——『試論集』第二論文の検討

諸 泉 俊 介

1. はじめに

『経済学試論集』「第二論文」「生産に及ぼす消費の影響について」¹⁾において、ミルはいわゆる販路説を集中的に取り扱っている。J. M. ケインズにより、ミルにおける販路説という論題が提示されて以来²⁾、「第二論文」は、同じく販路説を扱う『経済学原理』第三篇第十四章「供給の過剰について」との比較において、J. B. セイおよび父ミルの販路説との関連如何という観点から永い間研究の俎上に上って来た³⁾。

J. B. セイおよび父ミルによって販路説が確立されたのは19世紀初頭である。これに対してミルが販路説を再論する1830年代は、イギリス資本主義が古典的自由資本主義段階へと大きく旋回する時期である。それ故、ミルが販路説を取り扱う意図も、販路説の論理構成も、旧来のそれとは大きく異ならざるをえないことは想像に難くない。ミルが販路説を受容したか否か等の諸論点が論じられる所以である。

しかし、ミルが生きた歴史的背景を勘案した場合、ミルにおける販路説受容如何の問題と共に、そもそもミルは如何なる問題視角を以て販路説に係わる諸問題を取り上げるのか、あるいはミルは販路説を問題とすることで、イギリス資本主義の現実から如何なる経済学的諸論点の

剔抉を企図したのか、といった論点もまた存在しうるように思われる。こうした論点を考える場合重要と思われるのは、ミルが販路説の再検討と絡めて提示する「遊休資本」の理論である。ミルは「遊休資本」概念を考察する過程で、従来の古典派的資本把握を大きく変容し、現実的経済問題に対処せんと苦心しているのである。

本稿では、ミルが如何なる観点からこの「遊休資本」の概念を必要とし、またこの「遊休資本」概念を導入することで、自己の経済理論に如何なる特質を与える結果となるのかという点

1) J. S. Mill, *Of the Influence of Consumption on Production*, in *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. IV, University of Toronto Press, 1967, pp. 262ff. (以下 Es. と略記). 邦訳『経済学試論集』岩波文庫, 1926年。これは1829年～1830年に書かれたものであるが、出版されたのは1844年である。

2) J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, p. 119. 邦訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』ケインズ全集 7, 東洋経済新報社, 1983年, 19頁。

3) この点については以下の諸論稿を参照されたい。谷口吉彦『恐慌理論の研究』有斐閣, 1940年。溝川喜一『古典派経済学と販路説』ミネルヴァ書房, 1961年, 第5章。

R. G. Link, *English Theories of Economic Fluctuations 1815-1848*, 1959.

T. Sowell, *Say's law: An Historical Analysis*, 1972, Chap. 5.

また最近『経済学試論集』「第二論文」を取り上げた研究として、深貝保則「J. S.ミルのいわゆる販路説と恐慌観」(『古典派経済学研究 I』雄松堂出版, 1984年, 所収), および赤間道夫「古典派蓄積論=恐慌論争の受容と批判」『愛媛経済論集』5-2, 1985年, がある。

を検討し、もってミル経済学の基本的性格の一端を明らかにしたいと思う。

2. ミルの問題視角

(1) 消費問題と「一般的理論」

ミルは、「ある国の資本のうち極めて大きい部分が常に遊んでいる (lying idle)」¹⁾という。A. スミス以来、古典派経済学にとって資本は、道具、機械、原料および労働者の生活維持に費やされる財貨であり、利潤を求めて再生産過程で機能する財貨である。古典学派の資本蓄積論は、この資本規定の上に構築されている。それ故、古典派の資本規定からすれば、「遊んでいる」すなわち機能していない財は資本としての規定を剥奪されるべきものであろう。だとすれば、一般に古典学派の大成者と称されるミルが、何故このような根本的な概念規定の変更を行う必要に直面したのか、という問題が生じよう。ミルのこの新たな資本把握は、消費の問題と絡んで出てくる。消費を扱うミルの問題視角を見てみよう。

ミルは「生産に及ぼす消費の影響」と題するこの第二論文を、「一国を豊かにするものは、消費では決してなく、生産である」²⁾という主張をもって開始する。彼は国富の増大原因に関して、消費の重要性を高調する消費奨励論者と、生産の重要性を強調する生産奨励論者とを対比させる。その上でミルは、ここでは後者の立場に立ち、生産奨励論者の理論を科学的な「一般的理論」³⁾と呼び、その正当性を大いに強調するのである。

ミルは、消費奨励論者を論駁して「消費は決して奨励を必要としない」と主張するこの「一般的理論」を次のように整理する。

①「生産される総てのものは、そのまま、再生産のため、または享樂のために消費される」。②収入の貯蓄も消費であり、従って「消費は既に生産の分量が許すところの最大の範囲まで行われる」。③「再生産的なものと不生産的なものとの消費の二つの種類のうち、ひとり前者のみが国民的富を増加せしめ、後者はこれを損傷する」。④「生産するということは、生産者が消費しようとすることを含んで」おり、「商品一般の、それに対する消費が存在する以上の数量が生産されることは、決してない」⁴⁾。

ミルが消費奨励論の觀念に対して、科学的な「一般的理論」の中に重視するのは、再生産的消費＝資本の蓄積こそが国富増大の原因であるという見解である。そしてこの中心的命題を補完するものとしてミルの理解するのが、資本の蓄積もまた消費であり、消費の奨励を必要とするような、過剰な供給は存在しないといういわゆる販路説＝「消費の理論」である⁵⁾。

ミルの整理する「一般的理論」から直ちに思い浮かぶのは、父ミルの消費論であろう。父ミルは、W. スペンスの地主階級消費奨励論に対する批判を『商業擁護論』⁶⁾に著し、そこで資本蓄積と消費の問題を集中的に取り扱っている。1800年代におけるスペンス・父ミルの、いわゆる「貿易市場論争」である。この父ミルの消費論に対してミークは、そこに古典派の主要觀念

1) J. S. Mill, Es., *op. cit.*, p. 267. 邦訳76頁。

2) *ibid.*, pp. 262~263. 邦訳65~67頁。

3) *ibid.*, p. 267. 邦訳76頁。

4) *ibid.*, p. 263. 邦訳67頁。

5) *ibid.*. 邦訳67~68頁。

6) J. Mill, *Commerce Defended, An answer to the arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett and Others, have attempted to prove that commerce is not a source of national wealth*, 2nd ed., 1808. 邦訳『商業擁護論』未来社, 1965年。

の結晶を認め、「生産が主であり、消費が従であり、社会の経済的進歩は資本の蓄積にかかっており、しかも蓄積基金のありうべき唯一の源泉は社会的剰余である」⁷⁾という父ミル消費論の核心を剔出した。「(父)ミルの消費論は、内容的には資本蓄積論である」⁸⁾。「一般的理論」においては、消費は資本蓄積の陰にかくれ、理論の表面に独自の姿を現すものでは決してない。

こうした性格をもつ「一般的理論」の理論的正当性について、ミルは確信をもっている。彼は、今日ではこの消費奨励に基づく国富増大という学説は「ほとんど統べての人が至当にも誤りと考えており、抗論することは、現在のような科学の状態にあつてはその必要をみない」⁹⁾とさえ断言するのである。この点においてミルは、古典派経済学の正統な後継者として立ち現れるのであるが、同時に彼は、消費の奨励を強調する「謬見」への批判が、父ミル等による「一般的理論」を以て既に完了していると考えている。ではミルが、19世紀初頭に一旦は完了した論争を、『経済学試論集』執筆の1830年に再度俎上にのせる意図は何処にあるのであろうか。ミルの時代背景から探ってみよう。

(2) 周期的恐慌とミルの対応

1800年代の「貿易市場論争」から、『経済学試論集』執筆の1830年までの間には、かなりの時間の間隔があるだけでなく、そこには歴史的に大きな展開が存する。「貿易市場論争」を生み出す背景となったのは、1793年のナポレオン戦争

勃発に関連して現れた「最初の過渡的恐慌」および1779年の恐慌である。これらは、戦争あるいは凶作という偶発的事変に起因するという印象を強く与えた恐慌であった。その後、1806年の大陸封鎖の反動として1810年の恐慌が発生するが、さらに、1814年のナポレオン戦争の終結をうけて、商品の一般的渴望が一気に噴出する顕れとしての投機的貿易の拡大は、1815年および1818～19年の恐慌を発生させることになる。

こうした「過渡的恐慌」は、その背後にイギリス資本主義のマニファクチャ段階から機械制大工業段階への転回を孕みつつ、1825年の周期的・全般的過剰生産恐慌、すなわち「近代的恐慌」現出の物質的基礎を準備して行くものである。従って「1806年生まれのミルは、少年時代に『過渡的恐慌』を、青年時代には『近代的恐慌』をそれぞれ体験し、古典派経済学者の中では唯一……性格を異にする恐慌を目にしてその見聞を自己の著作に血肉化できる立場にあった」¹⁰⁾。まさに周期的に襲いくる恐慌こそが、ミルの時代に対応を迫られた大きな経済的問題であったと考えられる。しかし、ミルの意識の中にこの二つの恐慌は如何に映じていたのであろうか。

1825年恐慌の影響が色濃く残る1826年、ミルは『議会の歴史と評論 (Parliamentary History and Review)』誌に「1825年の商業恐慌および通貨論争についての苦心の論文」¹¹⁾である「紙券通貨と商業苦境」を執筆するが、そこにおいてミルは1825年恐慌の性格を次のように述べている。

7) R. L. Meek, *Physiocracy and Classicism in Britain*, *The Economic Journal*, March, 1951, p. 41. 邦訳『イギリス古典経済学』未来社、1956年、80頁。

8) 溝川、前掲書56頁。

9) J. S. Mill, *Es.*, *op. cit.*, p. 262. 邦訳65頁。

10) 赤間「古典派蓄積論＝恐慌論争の受容と批判」, 前掲論文16頁。

11) J. S. Mill, *Autobiography*, C. W., Vol. I, p. 121. 邦訳『ミル自伝』岩波文庫、107頁。

「投機は反動の原因であった。だが、投機の原因は何であったか？……最近の投機の原因は、大抵の以前の投機のそれと同様、予期された供給不足であった。／この回答は、昨年の出来事（1825年恐慌－引用者）が何か特殊で前例のない、すなわち以前に経験しなかった原因からしか生じえない何か全く奇妙なものと想像する人には、異常と思えるだろう。しかしながら、これは、商業の歴史に普通に精通している人によってすら考慮されなかった意見である。1784年と1793年の悲惨な時期を回顧せずとも、現在は、最近16年間に生じたのと同じ種類の四度目の商業反動である」¹²⁾。

ミルは明らかに、1825年の「近代的恐慌」を1810年以来の「過渡的恐慌」と「同じ種類」のものと捉えており、そこには明確な区別を意識してはいない。ミルには一般に、恐慌を独自に資本主義的な生産の内的諸関連において把握する思考が希薄である。しかしここで注目したいのは、ミルが恐慌を投機を原因とし「商業反動」をその結果とするものと、極めて現象的に把握している点である¹³⁾。ミルの恐慌に対する関心は、むしろ恐慌において過程する外観に注がれているのである。

さて、ナポレオン戦争終結後における急速な資本蓄積と戦争終結を背景とした経済の拡大は、商業的反動として商品滞貨＝グラットを目に見える姿で生みだした。恐慌の原因を商品の過少

消費から説明し、資本蓄積の限界に結び付ける議論が活発化するのには1820年代である。「一般的過剰生産」の存在を肯定するマルサス、シスモンディ、チャーマーズ等と、それを否定するセイ、リカード、父ミル、トレンズ等との間で繰り広げられたいわゆる「グラット論争」である¹⁴⁾。ではミルは一世代前のこの「グラット論争」をいかに受けとめているのであろうか。「第二論文」においてミルは、不況期においては確かに商品の滞貨が存在することを述べた後、次のようにいっている。

「一般的過剰の可能性を疑った経済学者は、いずれも、我々が右に指摘した現象が可能であることはもとより、しばしば発生することすら否定しているのであるから、彼らには、彼らが拒否する表現を、統べてのあるいは大部分の商品が売れないでいる事態に、……同じ意味において適用することはできないということを示す義務がある」¹⁵⁾。

ミルは、商品の一般的過剰は否定しえない当然の事態であるという。「グラット論争」に重ねて言えば、シスモンディ、マルサス等の一般的過剰生産肯定論者の立場に立ち、父ミルやリカードの一般的過剰生産否定論者を非難しているように見える。資本蓄積の基本的原因に関しては父ミルを正統に受け継いでいたはずのミルが、何故、恐慌の現象を認識する場合には消費の役割を強調するシスモンディやマルサスの立場に立つのであろうか。「グラット論争」の論点を振り返ってみよう。

12) J. S. Mill, *Paper Currency and Commercial Distress*, C. W., Vol. IV, p. 74.

13) かかる恐慌の「商業反動」としての理解は、『経済学原理』においても維持されている。『経済学原理』においては景気変動を、「誤算から生ずる、特に信用の不当な膨張と過度な縮小との交替－不合理な投機を以て始まり、一つの商業恐慌を以て終わるところの激しい変動」(J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, C. W. Vol. III/IV, p. 718. 邦訳『経済学原理』岩波文庫、(4)-35頁)と言っている。

14) これについては谷口、前掲書を参照のこと。

15) J. S. Mill, *Es., op. cit.*, p. 278. 邦訳98頁。

(3) 「グラット論争」の諸論点

「グラット論争」の前段に位置するのは W. スペンス・父ミルの「貿易市場論争」である。スペンスの論点は二つある。一つは、資本蓄積によって生み出される新商品に果たして買い手が存在するかということであり、第二の論点は、資本制社会では資本の過剰が存在可能であるかということである。

第一の論点に対して父ミルはいう。「その国の年々の生産物は、その地主たちが浪費する方を選ぼうと、蓄積する方を選ぼうと、常に一つ残らず完全に消費されてしまう」、「将来の利潤のために予定される部分は、直接の満足のために予定される部分とまったく同様に、完全に消費されてしまう」¹⁶⁾。父ミルの「貯蓄＝消費」論であり、退蔵されない貯蓄＝蓄積は総需要を減少させないという主張である。さらに第二の論点に対しては、父ミルは周知の販路説を以て反論する。いわく、「商品の生産は、生産された商品に対して市場を作り出す……唯一普遍の原因である」。「その国の全市場を構成するのは、……総支払手段である。だが、全国民の総支払手段は……その国民の年々の生産物に、すなわちその住民全体の得る年々の収入に存在する」、「したがって、いつ、どんな国で作り出される商品の追加量が如何なるものであろうとも、ちょうどそれと同額の追加購買力が、時を同じくして作り出されるのである。だから、一国は、資本または商品の何れにおいても、自然に供給過剰となることは、決してありえない」¹⁷⁾。父ミルの「供給＝需要」論である。しかし父ミルにとっても、現実のグラットは認めざるをえない。だ

が父ミルは、これは部分的供給過剰であるに過ぎず、決して一般的なそれではないことを強調するのである。「ある国が、商品一般を有り余るほどもつことはありえないにしても、なにかの一商品を有り余るほどもつことは容易である」¹⁸⁾。

父ミルの所論においては「資本の働き」が重きをなしている。商品の供給に対して需要が対応する（供給＝需要の理論）のは、商品を生産するものが、利潤をもとめて可及的速やかに投資＝使用に向かう資本であるからである（貯蓄＝消費の理論）。ここから、「資本の働きそのものが、生産物にたいする捌け口（vent）をつくる」¹⁹⁾という命題が生み出される。しかし、谷口氏が指摘されるように、父ミルが需要を構成するものは生産物＝収入であるという場合、そこには生産物実現の問題が暗黙裏に解決され前提されている²⁰⁾。父ミルは、消費の問題を生産に包摂せしめ、消費一般の独自の機能を完全に封じてしまう。

「貿易市場論争」を引き継ぐ形で、1819年、シスモンディが『経済学新原理』²¹⁾を公刊し、新たな局面を切り開き、さらに1820年にはマルサスが『経済学原理』²²⁾によってシスモンディに続いた。シスモンディと同様マルサスにおいても

18) *ibid.* p. 83. 邦訳99頁。

19) *ibid.* p. 81. 邦訳95頁。

20) 谷口、前掲書83～86頁を参照のこと。またスペンス・父ミル論争を整理したミークは、この二つの論点について、「ミルの二つの論旨が理論的に異なっている」ことに注意を喚起しつつ、「『セーの法則』を否定しつつ、同時に『貯蓄＝消費』論を受容することは明らかに可能である」ことを指摘している（R. L. Meek, *Physiocracy and the Early Theories of Under-Consumption*, *Economica*, Aug., 1951, p. 244 (foot note). 邦訳前掲書124頁）。

21) S. de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 1819. 邦訳『経済学新原理』日本評論社、1949～1950年。

16) James Mill, *Commerce Defended*, *op. cit.*, p. 71. 邦訳84頁。

17) *ibid.* pp. 80～81. 邦訳95頁。

貯蓄は投資を含むものである²³⁾。しかし「生産的労働に用いられた人々によって引き起こされる消費および需要は、それだけでは決して資本の蓄積および使用にたいする誘因を与えるものではない」²⁴⁾点が、シスモンディ同様、マルサスにとっての問題であった。彼は、父ミルの第二の論点である「供給＝需要」の理論に矛先を向けるのである。

マルサスは、商品の使用価値的側面を導入し、新資本により生み出される新商品の直面する市場を固定的に捉えることで、需要の不足と新たな外部からの追加消費力の必要性を主張する。こうした観点から彼は、父ミルの消費論を三点にわたって批判するが、そのなかで彼が、「きわめて重大な、そして最も重要な誤り」という第三の批判点が、父ミルが「蓄積は需要を保証すると考えること、また貯蓄を目的とする人によって用いられる労働者の消費は、生産物の継続的増大を刺激するような、貨物に対する有効需要を創造するであろうと考える」²⁵⁾ことである。マルサスが突くのは、蓄積が消費を伴うとしても、蓄積に伴う実現問題＝消費の問題が存在する点である。

さて、1821年父ミルは『経済学綱要』²⁶⁾を出版し、再度生産と消費の問題に言及した。しかし、先にみたように、シスモンディ、マルサス等によって生産と消費との問題は新たな局面に入っている。それ故父ミルは、『経済学綱要』第二版に、ことにマルサスを相手に大幅な加筆を行う

ことになったのである。父ミルは、「この(父ミルの一引用者)議論が正当であるためには『新しい嗜好と新しい欲望とが新たな資本とともに生ずる』と仮定することが必要である」という自己に対する批判点を紹介したあと、しかし「問題の嗜好と欲望とが本質的にまた必然的に資本の存在そのものの中に含まれていることは、……明らか」という簡単な文言で切り返し、「一切の資本の創造は需要の創造である」という主張を繰り返している²⁷⁾。

ここでの父ミルの理論は、『商業擁護論』と同様、社会的総供給・総需要の立場に立ち、資本の創造が自然・必然的に供給と需要とを伴うことを、検討の余地のない前提とするものである。父ミルは視点を社会総体に固定することで、資本の創造が必然的に伴わなければならない実現問題を看過したままである。マルサスはこの点を問題にしているにもかかわらず、『経済学綱要』における父ミルのマルサス批判は、資本蓄

26) James Mill, *Elements of Political Economy*, 1821. 邦訳『経済学綱要』岩波文庫, 1948年, ただしこれは第三版の翻訳である。この初版における消費論の論述は『商業擁護論』におけるそれとほぼ同様である。すなわち、保蔵しておくことには損失が伴う故に「蓄積されるものは総て消費される」。さらに「需要と購買のための等価物とは代替可能語であり」、人々は「需要と供給との両方をもって市場に登場する」が「各個人の需要と供給とが等しければ、その国の総ての需要と供給とは、全体として取れば、等しくなければならない」が故に「消費は生産と同範囲である」ことが整理して叙述されている。

27) 父ミルはここでマルサスを、「混乱を生ぜしめているものは、個々の貨物に起こるかもしれぬ、また現に起こっている供給過剰であ」り、反対論者の見解は一般的過剰を示していない、すなわち生産増加である一群の商品の価値が低下するのは、まさに同時に他の一群の商品では需要以下に供給が行われていることを示している、と批判している。また資本が急速に増加する結果、賃金が高騰し利潤が相対的に低下するという反論に対しては、それは「たとえそれが総て許容せられるにしても、供給過剰の存在を証明するものではない」として退けている (*Elements of Political Economy*, 3rd ed. 1826. pp. 235ff. 邦訳208頁以下)。

22) T. R. Malthus, *Principles of Political Economy, considered with a View to Their Practical Application*, 1820. 邦訳『経済学原理』上下, 岩波文庫, 1968年。

23) 「現代の経済学者はだれしも、貯蓄を以て単なる退蔵を意味することは出来ない」(*ibid.*, p. 33. 邦訳上-61頁)とマルサスは言っている。

24) *ibid.* p. 325. 邦訳下-157頁。

25) *ibid.* p. 359. 邦訳下-172頁。

積は資本であるが故に無条件に進む、というトートロジーに陥ったまま、社会総体の形而上学的議論から降りてこようとはしない。要するに父ミルは、消費という言葉を使いながらも、消費を正面からは取り扱っていないのである。

(4) 誤謬における真理

かくして「グラット論争」における議論は、マルサスと父ミルとの論争を見る限り十分にはかみ合っていない。父ミルの「消費の理論」したがって「一般的理論」は、マルサスが問題とする「消費」の問題を素通りしている。それ故、「グラット論争」から一世代をへ、周期的に出現するグラットを目の当たりにするミルが、消費を改めて取り上げることで父ミル等の「一般的理論」の不十分性を理論的に補完せんとしたところに「第二論文」執筆の意図を見ることも可能であろう。ミルは、自らの問題関心の存在がかかる「一般的理論」の単なる追認あるいは整理にあるのではないことを次のように強調する。

「我々がこの問題（「一般的理論」—引用者）に言及したのは、これらの基本的真理を現在以上に明瞭にしようと期待してのことではなく、……重要な真理の散在せる小片は陳腐な誤謬の廃墟の中に埋もれて失われてしまうものではないということを認める任務を遂行するためである」²⁸⁾。

ミルは、自己の確信する「一般的理論」の真理とは別に、「誤謬の廃墟」に埋もれ、発掘さるべき「真理」の存在を強調している。逆に言えば、「一般的理論」はこの「真理」を考慮していない、ということになろう。ミルが強調する「真

理」とは、分業の発展した社会における個々の商人および生産者に関し、「彼等がその店で販売し、その工場において生産する商品の大規模の需要、活発な流通、急速な消費が、彼等にとって重要である」²⁹⁾という、追加的需要＝消費が個別資本にもたらす追加的利得の問題である。

個別における消費の意義であれば、父ミルもまた指摘していた。社会に現実存在する部分的供給過剰およびその反面での部分的供給不足の問題である。しかし父ミルは、こうした部分的需給過不足の問題は総体としての「一般的理論」とは無関係であるという立場であった。しかしミルは、父ミルが「一般的理論」において無視したこの「消費の役割」をあえて問題にしようとする。彼は問う、「大きい収入を有する多数の外国人が、ある国に来てここでその収入を支出すると仮定せよ。こういう事柄は、国民的富という点からいって、これらの移住者を迎え入れた国にとって有利であろうか」³⁰⁾と。

「一般的理論」に立てば、もしこの収入が再生産的に支出され、国民的資本に対する追加分をなす場合であれば、そこから生みだされる追加生産物は国民的富の増加分であり、一国にとって有利な事態であろうが、仮にこの収入が不生産的に支出されれば、その国の利益とはならない。しかしミルは国民的富にあえて不生産的消費をぶつけ、「外国人消費者の購買は、それがなければその所有者に何の利益をもたらさない資本に、投資口を与える」³¹⁾のではないかと重ねて問うのである。「一般的理論」に従えば、投資と需要は相即的であるから、追加的消費の存否に拘わらず、およそ投資の口がないという議

29) *ibid.* pp. 264~265. 邦訳70頁。

30) *ibid.* 邦訳71頁。

31) *ibid.* 邦訳72頁。

28) J. S. Mill, *Es.*, *op. cit.*, p. 264. 邦訳69頁。

論は出てこない。「資本の働きそのものが、生産物にたいする捌け口をつくる」からである。しかしミルはここに問題を見ている。すなわち、資本が常に投資口を見いだすという推論が仮に正しいとすれば、この推論は「ある商人の店を訪れて貨物を買うことは、その商人にとって何等の利益にもならないということを証明」³²⁾するものである。何故なら逆に「何人も（その商人から一引用者）買わないとすれば、そこには過剰生産があるのであって、彼はその資本を引き上げて他の営業にその投資口を見いだす」³³⁾からである。それ故、資本がそれ自体で投資口をもつと考える限り、そこからは父ミルが事実追認的に認めた部分的過剰供給すら出てこないはずなのである。「一般的理論」は、一般的な供給過剰を否定し、部分的供給過剰を認めるところに理論的矛盾をはらんでいる。ミルは、「個人に適用されるとこのように不合理な（「一般的理論」の一引用者）推論が国民に適用されうるとすれば、それがよって立つ原理は多くの説明と説明とを要する」³⁴⁾と、「一般的理論」を批判するのである。

かくして、消費の問題を、市場における流通次元の問題ではなく、資本という生産の次元にまで引き戻して考えると、ミルの新しい問題視角を認めることができよう。彼は、一方で「一般的理論」を受容しつつ、他方では現実に存在するグラットをも、流通における部分的過剰とは異なる新たな理論を以て説明しなければならない。ミルが自らに課した課題はこれであつたのである。この課題にミルが如何なる解答を与えているか、節を改めて検討しよう。

3. 「遊休資本」の理論

(1) ミルの資本概念と「遊休資本」

ミルは、消費の役割の再検討を資本概念の再検討を以て始める。ミルの提示する旧来の資本定義は「労働者のために保留された食料品、衣服、その他の物品、および生産の材料と器具」¹⁾である。これに対して彼は、「資本は交換価値を有する物品で、その個人なり国民なりが自らの不生産的享楽のためではなく再生産のために所有する総てのものからなる、従って、未だ販売されていない総ての物品は国民的資本の、またこれを所有する生産者あるいは商人の資本の一部をなす」²⁾という新たな資本概念を提示する。

ここにおいて「未だ販売されていない総ての物品」とは、在庫商品と考えられる。ミルが旧い規定に付加する新たな点は、旧来の定義が資本を「生産に直接に役立つ」物品に限定するのに対し、資本の定義の中に在庫商品をも容れる点である。さらに彼は、「現在の形態のままで、あるいは間接にこれに先立つ（またはこれに続く）交換によって再生産的に使用されるという運命をもったものは、何であれ、資本である」³⁾と資本概念を拡張する⁴⁾。従って遊休する貨幣も資本と捉えられるのである⁵⁾。ミルの資本把

1) 2) *ibid.*, p. 266. 邦訳74頁。

3) *ibid.*, p. 267. 邦訳75頁。

4) この資本把握は『経済学原理』での、「『資本』と『非資本』との間の区別は、商品の性質にあるのではなく、資本家の心—商品がある目的ではなく、他のある目的に供せんとする彼の意志—に存する」(*op. cit.*, p. 57. 邦訳(1)-120頁)、という理解に結び付いてゆくものであろう。ミルのかかる資本把握が、資本とは何かという本質的問題に対しては十分に答え得ていないことは言うまでもない。剰余価値の概念把握を欠くミルにとって、それは当然の結果である。しかし、ミルのこの資本把握は「再生産に使用される運命」という抽象的な表現をまとい、また資本を商品としても捉え、未だ素材的理解を完全に払拭してはいないのではあるが、資本を素材的

32) 33) 34) *ibid.* 邦訳73頁。

握は、不完全ながらも、素材的把握を離れる。

さて、資本を再生産過程における多様な形態をとりうるものと規定し直すことからミルが導出するのは、先にも触れた、資本の中にある常に「遊んでいる」部分の存在である。すなわち、「ある国の資本のうち極めて大きい部分が常に遊んでいる、ある国の年々の生産物は、総ての資源が再生産に貢献した場合、簡単にいえば国の一切の資本が充分に使用された場合に生産される生産物に、大きさにおいて近いものでは決していない」⁶⁾。

ミルによれば、「遊んでいる」か否かの判断基準は、現実には生産的資本として機能しているか否かである。かくして資本は、「現実には機能している」生産的資本と「遊休資本」の二種類に区分される。注目すべきは、ミルが「遊休資本」の存在を、「総ての資本家の極めて大なる部分の各瞬間における恒例の状態」⁷⁾であり、さらに「資本の一大部分が恒久的に使用されずにあるということは、吾々が分業に対して支払うところの価格である、この買物は値段だけの値打を持っている」⁸⁾と、肯定的かつ必然的なものと捉える点である。

従って、「生産的資本」の分離に基づく「遊休資本」の存在は「分業」に支払われる対価として、分業の高度に発展した近代社会における不可欠の費用であり極めて社会的な存在である。

資本の分割が「各瞬間における恒例の状態」と言われている処から察するに、社会的分業の一定の発展段階では、社会的にもまた、二つの資本が理想的な比例的割合で与えられていると考えられているようにも思える。何れにしても、ミルの「遊休資本」概念は、個別資本の観点に留まらず、社会的観点から捉えられているのである。

(2) 追加的需要と利得の性格

この「遊休資本」の概念を以てミルは、消費の生産に対する影響に立ち向かうのであるが、彼はまず個別資本に視点を据え、個別の商人および生産者が、急速な消費によって獲得する利得 (benefit) の性格を析出する。いわく、「追加の顧客は、多くの商人にとって、生産的資本の増加に等しい。彼等はこの顧客によって、彼等の資本のうち遊んでいた……部分を賃銀と生産の器具に転化しうようになる」⁹⁾。すなわち追加の顧客は、在庫として「遊んでいた」商品を解放する。一般的に言えば、消費によって資本の回転数が上昇し、それだけ「遊休資本」の解放がなされる。それはより多くの生産的資本の活動であるが故に、利得の増大である。では、その利得の性格は何か。

ミルは、個別資本が大規模な需要から獲得する増大した利得の「厳密な性格」を、次のように規定する。第一に、売れない貨物の形に固定されている部分が活動することにより「現実的」な生産的資本へ移行した部分がもたらす利得である。第二に、追加需要が「遊休資本」の解放による供給を超え、かつ個別資本が営業以外(例えば公債)に投じられている場合、かかる資本

に生産資本循環視点からのみ把握する視点から一歩ぬけだし、それを交換価値の再生産過程の循環内部における形態規定として捉える一歩手前までできているものと評価することができよう。

5) 「物品を売って売上金を実現し、これを再び賃銀と道具とに支出するに到るまでの期間中、私は資本を持っていないと言えるであろうか、確かに言えない」(Es., *op. cit.*, p. 267. 邦訳75頁)。

6) *ibid.* 同上。

7) *ibid.* 邦訳76頁。

8) *ibid.* 邦訳77頁。

9) *ibid.* 邦訳78頁。

の生産的資本への転化による、利潤と利子との差としての「監督賃銀 (wages of superintendence)」である。第三に、仮に追加需要が借入資本までをも必要とするとすれば、その拡大した部分から得られる「監督賃銀」部分である¹⁰⁾。従って、ここでの利得はいわゆる特別利潤であると考えられよう。

かくしてミルは、個別資本が大規模な需要、活発な流通、急速な消費によって獲得する利得の性格を、再生産に使用される資本の増加から説明する。かかる説明を以てミルは、「これがある商品を取引する商人が彼と取引する人々の数の増加から引き出すところの一切の利得の完全なる説明である」¹¹⁾と自負するのであるが、さらに、「これらの利得は現実的で重要であり、かつあらゆる種類の商人をして事業の拡張を願わしめる原因である」¹²⁾と述べ、この利得を資本にとっての事業拡大の動因に据えるのである。ミルが、利潤の再生産的使用たる第一義的な消費の機能とは別の観点から、「遊休資本」の解放を行う消費の機能を指摘し、この消費が資本の運動を惹起せしめる可能性を示唆している点に注意しておこう。

(3) 活発な需要の意味

さて、「遊休資本」概念の導入によって、消費の影響は、資本の再生産的使用に係わって考察されることになる。すなわち消費が資本に多くの利得をもたらすのは、資本の活発な運動に基づく。資本にとって追加的顧客の増加が「遊休資本」の「生産的資本」への転化であり、今まで遊んでいた資本の機能化であるのと同様に、かかる事態を社会的観点にまで拡大した場合に

もまた、社会的に無機能化している資本の機能化が考えられよう。追加的需要を社会的観点から捉えれば、それは「その国の翌年の総生産物を、もし交換されなければそうであった事態に比べて増加せしめる」¹³⁾ことになる。それは社会全体にとっては正に、機能する資本の増大を意味する。それ故ここに、追加的需要が一国にもまた利得を与えるという推論が、可能性として与えられるのである。

かくしてミルは、「遊休資本」を絡ませることで、個別資本の観点から国民的利得という社会的観点への架橋を果たそうとしている。ミルが社会的問題へと視点を移した地点で目にする現実には、活発な需要が存在し、個別諸資本が「監督賃銀」までをも大いに獲得し、自らの事業の拡張を願っている事態、すなわち好況期である。それは個別資本の利益のみならず国民的富の増大がもたらされているように見える事態である。

さて、父ミルが個別諸資本の競争として描いた、「一群の財貨が需要以上に供給されている場合には、常に他のもう一群の財貨が需要以上に供給されている」¹⁴⁾という事態は不況期である。父ミルが「一般的理論」に関連するとは決して考えなかった事態でもある。これに対してミルの場合には、父ミルが価格の変動という流通次元の問題として捉えたのとは異なり、問題を生産の次元において捉えている。しかもミルの場合には、問題を好況期において捉えるのである。ではミルの場合には、消費が主導し利得が拡大する資本の競争を如何に評価するのであろうか。

ミルは、消費の主導による利得の時期は、一国全体としても大いに利得している時期である

10) *ibid.*, pp. 269~270. 邦訳80~81頁。

11) 12) *ibid.*, p. 270. 邦訳81頁。

13) *ibid.*, p. 269. 邦訳78頁。

14) James Mill, *Elements*, 3rd ed., p. 234. 邦訳210頁。

かと自問し、しかし、そうではないと断言する。いわく、『『活発な需要の時期』とはまた最大規模の生産の時期でもあるのであって、国民的資本はかかる時期を除いては決して完全に使用されることはないのである。けれども、これはかかる時期を願う理由とはならない。国の総資本が完全に使用されているということは、決して望ましいことではない』¹⁵⁾。ミルは何故、「遊休資本」が減少し、生産的資本が完全に使用される事態を「望ましいことではない」と考えるのであろうか。

(4) 「遊休資本」の二重の意味

ここでミルが資本の再規定の際に与えた「遊休資本」の意義について思い出さねばならない。ミルは、「遊休資本」は分業の対価であり、「値段だけの価値を持っている」とその存在意義を高く評価していた。「遊休資本」の減少する時期が「望ましいことではない」とするミルの判断は、実はこの「遊休資本」の存在意義にかかっていると思われる。ミルは言う。

「生産者および商人たちの予想は必然的に不完全であるため、足りない商品が常にあるのと同じく、多かれ少なかれ、過剰な商品も常に存在する。従って真相全体が明らかになったならば、操業を拡張せずして縮小しているある種類の生産者たちが常に存在するであろう」¹⁶⁾。

すなわちミルは、分業が広く展開されているが故に発生する諸部門間の不均衡の存在を必然的な事態と見ている。ミルにとって、部門間で起こる「過剰生産」は社会的分業の必然的な付随物であり、存在してしかるべきものである。更に穿っていえば、かかる不均衡を調整するも

のこそ、かの「遊休資本」にほかならない。すなわちミルが資本概念の再検討から剔出した「遊休資本」の基本的意義は、社会的観点からすれば、部門間不均衡調整のメカニズムを機能せしめるバッファである。ミルは、父ミルが現状追認的に認めていた部分的過剰生産に対し、「遊休資本」の導入を以てこれを理論的に位置づけるのである。ここに「消費の生産に及ぼす」第一の役割がある。

しかし「監督賃銀」という利得を動因として、個別資本は個別的「遊休資本」の基準を越えて事業を拡張する。すなわち個別資本は、分業社会の故に存在せねばならぬ社会的「遊休資本」を利用し、それに乗じて自己の事業を、「遊休資本」の機能範囲を越えて拡張するのである。ミルの捉える好況期にほかならない。これをもたらすものもまた、活発な需要である。だが、ミルに従えば、それは「ある種の一般的幻想」¹⁷⁾が支配する事態である。すなわち部門間不均衡を調整すべき消費の機能が、「幻想」によって理想的状態を越え出た事態である。ここに「消費の生産に及ぼす」第二の役割を指摘できるであろう。

好況期の実態がかかるものであるとすれば、ミルが一国の総生産的資本が完全に使用される事態を「望ましいことではない」とした理由は容易に理解できよう。すなわち「幻想」が支配する好況期の「活発な需要」に支えられて総ての部門が拡張するという事態は、社会的分業の発展によって劃された「遊休資本」の一定の水準の攪乱である。しかし、それは「幻想」であるが故に、「幻想が消えて真相が露呈すると、相対的に過剰となった商品をもっている人たちは

15) J. S. Mill, Es., *op. cit.*, p. 274. 邦訳91頁。

16) 17) *ibid.*, p. 275. 邦訳91頁。

その生産を縮小するか、あるいは破産しなければなら¹⁾ない。ミルにとって「遊休資本」は、再生産活動の基準線であると同時に、活発な需要＝消費によって越えてた生産が引き戻される基準線でもあるのである。

かくしてミルは、父ミルが理論的つながりを欠き現状追認的に認めた諸資本の競争下における部分的過剰の現実を、再生産の次元に引き戻し理論的に位置づけた。しかしミルのこの「遊休資本」の理論は、果たして彼の経済理論に如何なる意味を付与するのであろうか。注目すべきは、ミルの理論が、父ミルやマルサスが不況過程を問題にするのとは異なり、専ら好況過程を視野に納めていることである。ここにミルの特異性がある。彼の恐慌把握を見てみよう。

4. 商品の過剰と資本の過剰

——ミルの恐慌把握

(1) 「一般的過剰」と「一般的買い渋り」

「遊休資本」概念を用いることで、ミルは好況期を理論化した。これが、父ミルが現状追認的に認めた不況期の部分的過剰を捉える足場である。ミルの理論は、「グラット論争」を景気循環過程において捉え返すことを可能としている。事実ミルの恐慌把握は、「一般的な幻想」を根拠としつつも、景気循環の観点からなされているのである。すなわち言う。

「現在のような商業界の状態においては、商業上の取引は極めて大規模に行われているけれども、物価の変動の諸遠因は殆ど理解されておらず、その結果不合理な期待と不合理な恐怖とが代わるがわる商業界の人々の大多数の者の心を、暴君の権威を以て支配しているから、一般

的な購買熱と一般的な買い渋りとが、短い間隔において、多かれ少なかれ顕著に交代する¹⁾」。

「一般的な購買熱と一般的な買い渋り」とを以て景気循環の二局面変動を捉えるミルの恐慌観である。ではこの観点から「一般的な買い渋り」、すなわち不況期を捉えるとどうなるか。ミルは続けて言う。

「短い過渡期を除けば、大なる営業の振興が大いなる沈滞かが、殆ど常に存在し、殆ど総ての主要な工業品の主だった生産者たちが辛うじて応じうるほど多数の注文を受けるか、さもなくば殆ど総ての商品を取引する人々が売れない商品で倉庫を満たすかしているのである。／この後の方の場合には、普通、一般的過剰(*general superabundance*) が存すると言われる²⁾」。

ミルによれば、好況期における購買熱も、不況期における買い渋りもともに一般的である。それ故、ミルにとって不況期における商品の過剰は、まさに一般的であり必然的な事態である。先にも触れたが、彼はこの観点から「一般的理論」の立場に立つ父ミル等の論者を次のように批判する。いわく、「しかし、一般的過剰の可能性を疑った経済学者たちは、何れも吾々が右に指摘した現象が可能であることは固より、しばしば発生することすら否定しているのであるから、彼等が拒否する表現を、総てのあるいは大多数の商品が販売できないという事態に、市場の欠乏から商人の倉庫に残っている時にある商品の過剰が存すると言われる時と、同じ意味においては適用することは出来ないということを示す義務がある³⁾、と。

しかしミル自身も、表現上は「一般的過剰(*general superabundance*)」なる言葉を意識

18) *ibid.* 邦訳92頁。

1) 2) *ibid.* 同上。

3) *ibid.* 邦訳92～93頁。

的に避けてきた⁴⁾のではあるが、先には「一般的理論」の正統性を主張し、「商品一般の、それに対する消費者が存する以上の数量が生産されることは決してない」とその主張を支持していた。それ故ミルの父ミル等に対するかかる批判は、ミル自身へも向けられているわけである。かくしてミルは、ここに新たな課題を設定し、その解答を「一般的過剰」否定論者の依拠する販路説の議論に沿って探っていくのである。

(2) ミルによる販路説の変容

ミルの販路説に関する議論は三層に分かたれる。第一の層は「販売者であるという単なる事実によって購買者たるもの」⁵⁾という「形而上学的必然性」⁶⁾による「一般的過剰」の否定である。父ミルが依拠していた理論であるが、かかる「形而上学的必然性」の理論に対してミルは、この理論は明らかに「物々交換の状態の仮定に基づく」⁷⁾ものであり、この仮定の上ではかかる理論は完全に正しいと肯定する。しかし、当然ながら、かかる仮定は現実的事態とはほど遠い。ミルの理論には高度に発展した分業と景気循環が組み込まれている。それ故、かかる「形而上学的必然性」の理論は「一般的原理」たりえても、現実把握の武器たりえない。それ故ミルの議論は第二層に向かう。

第二の層は、貨幣が介在する場合である。「しかしながら、貨幣が用いられると仮定すると、これらの命題は必ずしも真理ではなくなってくる」⁸⁾。この第二層こそ、ミルが先に剔出した二

局面的恐慌に対応する現実的な想定であり、ミルの本意もここにある。ミルは貨幣が介在する場合の物々交換に対する差異を、販売と購買との分離を求める。いわく、「貨幣使用の効果……は、それによってこの一個の交易行為が二つの相異なった行為または取引に分割され、一方はいま遂行されるのに、他方は一年後、あるいは何時でも最も都合なときに行われるということである」⁹⁾。

従って、販売と購買との分離下では、商品の供給増加が商品の需要増加に即時的に対応するとは言えなくなる。ミルはかかる事態こそが現実であり、「一般的過多 (general excess) の時期と呼ばれる時期には、これがいつも現実に生じてくる」¹⁰⁾、と言う。ミルは過剰の存在を、言葉を変えて「一般的過多」として認める¹¹⁾。ここでミルが、「一般的過多」の時期に現れるとする「売ろうとする一般的渴望と購買に対する一般的忌避」¹²⁾なる事態は、先に展開された「活発な需要」の時期に対応するものであろう。だとすれば、ミルは販売と購買との分離を以て、今度は「遊休資本」の過剰な形成を説明していると考えられよう。販売と購買との分離に基づく過剰在庫の形成である。しかしそれは言うまでもなく「遊休資本」の基準線を巡っての運動であり、従って、「買うことなくして売った者も終に

10) *ibid.* 邦訳95頁。

11) ミルは一般的過剰に対して二つの用語を使い分けている。一つは経済学者達はその存在を疑問視する市場の欠乏に起因する過剰であり、これをミルは「general superabundance」と表現している。この「superabundance」という表現は、父ミルが『経済学綱要』において用いている。第二に現実的な景気循環過程で現れる、物が売れないために倉庫に累積される過剰在庫の存在に対応する過剰であり、ミルはこれには「general excess」という言葉を充てている。便宜上ここでは前者を「一般的過剰」、後者を「一般的過多」と訳す。

12) J. S. Mill, *Es., op. cit.*, p. 277. 邦訳95頁。

4) 深貝「J. S.ミルのいわゆる販路説と恐慌観」、前掲論文354～356頁。ここで深貝氏は、ミルが如何に厳密に用語を使い分けているかを詳細に検討されておられる。参照されたい。

5) 6) J. S. Mill, *Es., op. cit.*, p. 276. 邦訳93頁。

7) 8) 9) *ibid.* 邦訳94頁。

は必ずや買うだろう」から、「以上のような状態がただ一時的なものであるに過ぎ」¹³⁾ないことは当然である。「遊休資本」のもつ部門間過剰生産の調整メカニズムは、ここでは販売と購買との分離という理論によって具体的運動の契機を与えられているのである。

かくしてミルは、貨幣を導入して父ミルの販路説を変容し、そこから「一般的過多」の存在を導出した。しかしこの「一般的過多」が販売と購買との分離に基づく限り、それは諸商品間あるいは諸部門間での問題である。「一般的過剰供給は必然に一時的なものに過ぎぬとしても、このことは総ての部分的過剰供給について言われうるところに過ぎない」¹⁴⁾。すなわちそれは、総ての商品の商品に対する「一般的過剰」ではない。それ故ミルは続けて、「一般的過多」と「一般的過剰」との区別に進む。第三層における議論である。

(3) 「一般的過剰」と貨幣の過剰

「総ての商品の過剰というものは不可能であるという議論を流通媒介物が用いられている場合に当てはまるようにするためには、貨幣そのものが一つの商品と考えられなければならない」¹⁵⁾。

ミルは第三層として、貨幣を商品と考えるべしという議論を導入する。かかる議論の伏線は、ミルが、在庫商品とともに遊休した貨幣を導入し、資本を新たに定義し直した時点で既に数かかれていた。かかる見地からミルは、今度は、商品の「一般的過剰」肯定論の誤謬を剔出して行く。すなわち、彼等は貨幣を商品の一つであるとは考えなかったが故に、「一般的過多」の時期

には、貨幣の過多があるのではなく、逆にその不足があると考えた。ミルが指摘する事態は、恐慌期における支払い手段の不足である。しかし、貨幣を商品として捉えた上で、商品一般の過剰か否かを問えば、「同時に貨幣の過剰を伴うところの他のあらゆる商品の過剰なるものは在りえない」¹⁶⁾。過剰論者が「一般的過剰 (general superabundance)」と呼んだものは、諸商品の諸商品に対する過剰ではなくて、あらゆる商品の貨幣に対する過剰であった」¹⁷⁾のである。その結果として、「総ての価格が低下し、あるいは売れなくな」¹⁸⁾っている、とミルは主張するのである。

従って、商品の貨幣に対する過剰という意味であるならば、ミルもまた「一般的過剰 (general superabundance)」なる事態を認めるのである。しかしかかる事態は、「一般的過剰」論者が言うような市場の欠乏なる事態に起因するのではなく、個々の商品の貨幣に対する過剰に起因し、しかもそれが多くの商品に広く起こり一般化された事態ということになる。ミルは言う。

「一個の商品についてこれが生ずると、その商品の過剰が存すると言われる。もしもこれが適切な表現であるとすれば、総てのまたは大部分の商品が同一の境遇にあるとき、総てのまたは大部分の商品の過剰が存するということは、この事の性質から観て、何等特殊な不都合はない」¹⁹⁾。

ここで注意せねばならないのは、ミルが受容した「一般的過剰」の内容である。従来の過剰論者の主張の中には、過剰生産が「一般的過剰」の原因であるとの理解が含まれていた。だが、以上のミルの議論に従えば、「一般的過剰」の原

13) 14) 15) 16) *ibid.* 邦訳96頁。

17) 18) 19) *ibid.* 邦訳97頁。

因は貨幣の退蔵に基づく価格の低下，すなわち貨幣現象であり，諸商品全般における生産の過剰ではない。ミルは「諸商品全般の過剰生産 (excessive production of commodities in general)」を否定する。すなわちいう。

「すべての商品に対する市場が，これ以外の何らかの意味において，供給過剰 (overstocked) でありうるという想像は……不条理を含む。……一個の物品に対する市場の欠乏なるものはこの物品の過剰生産 (excessive production) から生じるが，諸商品全般が売れなくなる時，それは全然相異なった原因によるものであって，諸商品全般の過剰生産はありえない」²⁰⁾。

ミルは，商品と貨幣とを使い分けることで，「一般的過剰」があくまでも貨幣に対する商品の過剰であるに過ぎないことを結論づけている。言い替えればミルは，貨幣を含めた統べての商品に対する過剰，いわば資本の過剰という事態を，景気循環において現れる単なる商品の一般的な過剰から分離し，「商品の過剰」から「資本の過剰」への推論の経路を断ち切っているのである。

5. むすびに代えて

ミルが「第二論文」で問題とした消費は，父ミルらが生産的消費と不生産的消費との区別において論じた消費とは根本的に異なっている。ミルは，消費に二つの機能を賦与した。第一は，分業が本来もたらす部門間不均衡の調整に果たす消費の役割であり，第二は，かかる調整の範囲を超えて生産を拡大せしめる消費である。ミ

ルの消費論は，それを市場を通して資本の運動に及ぼす影響として捉えるものである。

さらに穿って考えれば，ミルはこの消費の第一の機能に，生産力の発展に伴う諸商品間の需給関係の変化，更には産業構造の変化を現実的に運動せしめる契機を見ており，更にかかる変化が資本主義社会においては循環的運動を通してのみ行われ，従ってここに景気循環の根拠を見ている，とは言えないであろうか。かかる循環的運動は，消費の第二の機能に基づいて拡大され現実的な景気循環の運動へと展開されるのである。ミルの視角は，経済の現象面に，景気循環過程に鋭く注がれているのである。

しかし，ミルの立場はあくまでも，生産こそ国富増大の根柢的要因と考えるものである。消費は，資本蓄積運動にとってはあくまでも副次的役割を果たすに過ぎない。それ故ミルは，消費奨励論者の抱く「資本の蓄積が，貧困を生産するばかりで富を生産しないと，それ自身の目的にとっては余りに急速に行われるであろうという恐怖」¹⁾が空想的である，と喝破する。彼らは，商品の一般的過剰を資本の一般的過剰と取り違えているというのであろう。ミルにとっては，資本蓄積は諸商品間の不均衡調整とは別次元の問題である。

かくしてミルは，資本蓄積の古典派的命題を堅持しつつ，しかしそれでは説明しえない恐慌現象を自らの理論に包摂した。これを説明する理論が，資本の運動をより具体的なものとして捉える「遊休資本」の理論であったが，それは経済を動態化し，景気循環と絡めて資本蓄積過程を捕捉するものであった。現実的な資本の運動を，マルクスは生産資本・商品資本・貨幣資

20) *ibid.*, p. 278. 邦訳98頁。

1) *ibid.*, p. 178. 邦訳99頁。

本の三循環の統一と捉えたが、ミルはこれを生産的資本と「遊休資本」との統一的運動と捉え、それを以て現実的経済の運動を捕捉せんと企図したのである。ここに、時代に迫られてミルが切り拓いた新たな問題領域を認めることが出来るよう。

(長崎大学商科短期大学部)